

「ザカリアへの告知」

(ルカ1:5～25)

挽地茂男

2019.11.17 日本基督教団千歳丘教会礼拝

さて今日の聖書の箇所は、クリスマスの主人公であるイエス・キリストの誕生に、6ヶ月先だって生まれたもう一人の幼子の誕生を——主イエスの受胎告知と同じように——天使が告知する物語です。その幼子は、後

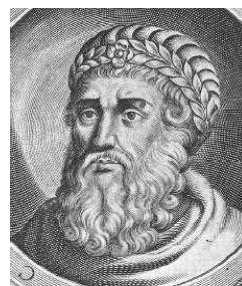


に洗礼者ヨハネ（バプテスマのヨハネ）と呼ばれる人物です。

さて聖書は洗礼者ヨハネの両親のザカリアとエリサベトについてこう伝えます。

「1:6 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。」ヨハネは両親のもっていたこの神の前での正しさを、自分の正しさとして——彼もまた——神の前に身につけ、そして立ち上がったのでした。本日の箇所は、そのヨハネの父親であるザカリアが、天使からヨハネ誕生の告知を受ける物語です。ルカによる福音書1章5－7節。

「1:5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘



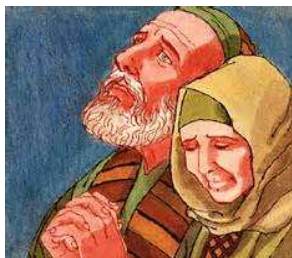
ヘロデ大王

の一人で、名をエリサベトといった。1:6 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。1:7 しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。」ザカリアと妻のエリサベトが住んでいたのは「山里」にあるユダの町でした(v. 39, 65)。ザカリアはエルサレムではなく地方に住む地方祭司でした。この地方祭司たちは組み分けされていて、一定期間、地方(=ユダヤ地方)からエルサレムに上京し、神殿の聖所で務めを果たすことを義務づけられていました。そのザカリアが、神殿で自



分たちに割り当てられた務めを果たしていたとき、天使からヨハネの誕生を告げられたのでした。この老夫婦に、しかも不妊の女(v. 7)と呼ばれていた妻エリサ

ベトを通して、新しい生命の誕生が訪れます。神が働くとき、**静から動へと、（人間の目には）不可能の壁が動き始めます。**



しかしこの新しい生命の誕生に——つまり救いの歴史に——参与したのは、ザカリアとエリサベトという二人の老人でした。「**二人とも既に年をとっていた**」と聖書が語るとき、聖書は、彼らが高齢であったという客観的情報を伝えているのではないのです。聖書は「老いる」ということの悲しみや苦しみも、承知しているのです。仏教は「生老病死」という短い表現の中に、「老いる」ことが苦しみで

あることを確認しました。老年を迎えるということは、少しずつ人生の可能性を奪われていくということ



す。つまり、若い頃に出来ていたことが出来なくなっていくということなのです。自分のやりたいことができなくなっていくということであり、行きたいところに行け

なくなっていくということであり、食べたいものが食べられなくなっていくということなのです。しかもザカリア夫婦の場合、妻エリサベトは不妊の女性(v. 7)でした。妻は自分を責めたでしょう。痛みを持って責めたでしょう。「**子供がな**」いということは、老後の不安が、子どものいる人たちより大きくなります。しかし、夫ザカリアは、妻以外の女性によって子どもをもうけようとはしなかったのです。あのアブラハムでさえ、妻サライが不妊の女性(創11:30)だったので、女奴隷ハガルをとおして息子イシュマエルをもうけたのです。それが古代のユダヤ世界の常識でした。しかしザカリアは、そうしませんでした。世間では「少子高齢化」が叫ばれています。課題は、年を追うごとに大きくなっていきます。教会は世間よりも急速に「少子高齢化」を迎えています。ザカリアとエリサベトの老夫婦は自分たちに迫ってくる「老い」をどう考えていたのでしょうか。

「老い」の苦しみや悲しみ脱却するために、今日の教会がザカリアとエリサベトから学ぶべきことがあるのでしょうか。

「老い」の悲しみから脱却するために「笑い」の有効性を指摘する心理学者は少なくありません。

「老い」を笑ってしまう、ユーモアに変えてしまうのです。お笑いの世界に綾小路きみまろという漫談師がいます。彼の漫談は、中高年を罵倒しながら元気づけるメッセージを送る「中高年の応援歌」と言われます。マイナスと見られる「老い」を笑いのネタにし、笑い飛ばすことによって、精神的な解放を得るのです。教会で漫談など取り上げるのは顰蹙を買うかもしれませんが、外側から説明しているだけでは分かりにくいので、少し見聞を広める意味でも一くだりご紹介します。



人間はながくいき
ておりすと増える
ものばかりです。

シワが増え、白髪が増え、目方で増え、コレステロール、血糖値、中性脂肪、そしてありあまるほどの皮下脂肪。つかんでみたけどまだあまる。こんな体に誰がした。

「よいしょ」といわないと立てない。「よっこらしょ」といわないと座れない。若いころ、一気にか

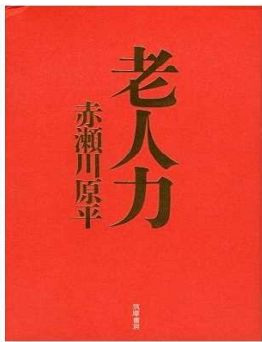
けあがっていた階段も、階段の途中でハアハア、ハアハア。中高年が階段の真ん中で出口を失っております。

お洋服で若さを前面に出して、お化粧で年齢を隠しても、お洋服の下はピップエレキバン、ホカロンに万歩計。

「老い」のもつマイナスの側面を笑い飛ばしてしまいます。笑うことによって「老い」を対象化し、「老い」のもつ絶対的なマイナスを相対的なマイナスに格下げします。

あるいは、「老い」のもつマイナスの側面を、マイナスと考えないでむしろプラスと考えてしまうという、一種の逆転の発想があります。「若い」ということや「元気」だということを一面的によいことと考えずに、「老い」ていくことを「良い」ことととらえ直します。赤瀬川原平（あかせがわ げんぺい、1937年3月27日 - 2014年10月26日）が1997年に提唱した「老人力」という概念です。「老人力」という表現は冗談から始まりました。赤瀬川が物忘れがひどくなったり、繰り言が多くなったので、作家の仲間たちは、原平さ

んは「年取ったな」とか「耄碌したな」と思うわけです。しかし原平さんが自分たちよりも一回りも年上なので、「年取った」とも「耄碌した」とも言えずに、「老人力がついてきた」と言い出したのです。赤瀬川はこの「老人力」とい



う言葉が、「老い」のもっている何か積極的な価値をとらえている、と直感するのです。そこから、赤瀬川と

その作家仲間たちは、「老人力」の正体を突き止める探求の旅を開始します。もう「老い」たことを、「耄碌した」とか「ボケてきた」とか「老いぼれた」などとは言わない。「老人力」がついたと表現する。例えば、「物忘れが激しくなった」など老化による衰えというマイナス評価を「老人力がついてきた」というプラス評価へと逆転します。「繰り言」（話の繰り返し）が多くなって、何度も同じことを口にする。老いぼれてしまったな、とマイナスに行かずに、「なかなか老人力がついてきた」と逆転する。ちょっとした言葉に「ため息」が混じる。少し前まで「ど

っこいしょ」と言っていたのが、「あ」がついて「あどっこいしょ」となるさらに老人力がつくと、「あーどっこいしょ」となる。「やれやれ」と言っていたのが、「あやれやれ」となり、ついに「あーやれやれ」となる。これまた、体力が落ちてしまった証拠だな、とマイナスに行かずに、「老人力がついてきた」と逆転する。一見言葉のすり替えのように見えるこの発想は、「若さ」や「元気」であることが絶対的に良いことであるという発想から視点を変えて、「老い」を人間に必要な「力」として見直すのです。物忘れ、繰り言、ため息など、従来は、「ぼけた」とか「耄碌した」として忌諱されてきた現象に潜む未知の力を発見する。むしろ「老い」のもつ所謂「マイナス」とよばれるの力が作用して、独特の味わいを創り出していることに目を向けるのです。

「老人力」は中々説明が難しい。理屈で言ってしまうと——信仰と同じで——姿が見えなくなるので、赤瀬川原平は具体的な例をいくつも紹介します。「信仰」の場合も、例えば、「信仰」とは「絶対者に対して全身全霊を帰依する人間の

態度」である、と説明してしまうと、なるほど間違っていないかもしれませんが、「信仰」の姿は見えなくなってしまう。理屈を言うより、イエスの着物の房にでも触ればきっとイヤされると信じた「長血の女の信仰」や主イエスが今はただ信じなさいと諭された「会堂長ヤイロ」の信仰の具体的な姿を見た方がわかりやすいのです。赤瀬川は「老人力」を説明するために、人間の例だけではなく、よく「ライカ」というカメラを例に持ち出します。「ライカ」はカメラの歴史の中に燦然と輝く金字塔なのです。今はデジタルの時代になって、誰でも簡単にブレのない鮮明な写真が撮れるようになりました。「ライカ」はフィルム・カメラ〔ライカは現在、ライカQ、ライカM10-P、ライカM10、ライカMというデジタルカメラも製造している〕でもう



3億1500万円で競売された1923年製試作品O型ライカ

時代遅れ、古道具、骨董品と言われるところですが、いまでも愛好家があとを絶たず、ライカで写真を撮り続ける写真家もいるのです。〔ライカの前身は、1849年に設立された顕微鏡メーカー。エルンスト・ライツ(1世)は、この会社を1869年に引き継ぎ、1905年からカメラ生産に参入、1907年に双眼鏡生産に参入します。技術者オスカー・バルナックとともに開発・改良を重ねて、1913/14年にライカの原型となる「ウル・ライカ」を完成。1920年エルンスト・ライツの没後、後継者〕エルンスト・ライツ2世は技術者オスカー・バルナックにライカの原型となった



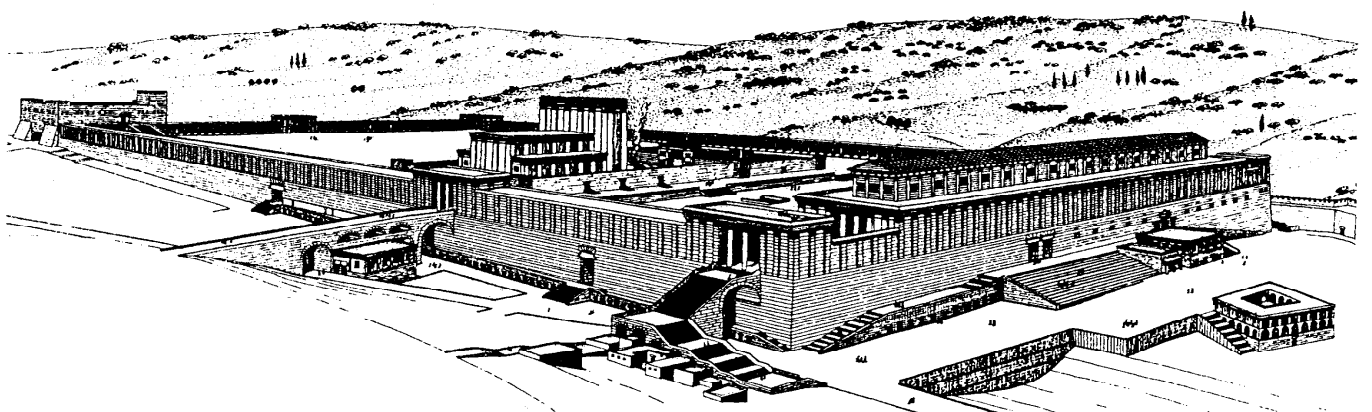
Leica , M3

「ウル・ライカ」に改良を加えさせて1925年ついに、「ライカ」(ライツのカメラ)と命名して、市販一号機ライカI(A)を生産、販売します。そして1954年に当時最高とまで言われる技術を余すところなく結集したライカM3が発表されます。写真撮影におけるライカの全盛期を不動のものにした

とされています。ライカ社が手がけたライカのMシリーズやライカのRシリーズの名器で撮られた写真には、独特な風合いがあると言われます。絞りなど明るさを調節することでわざと被写体をふんわりとボケさせたり、反対に質感がよくわかるようにシャープに写したりもできます。そのボカし具合や質感のシャープさが絶妙だそうで、プロのカメラマンや芸術家も認める、現在のデジタル・カメラにはない独特の味わいが宿るのだそうです。それは、現在の最新の優れた「技術」によっては得られない別種の魅力なのです。赤瀬川は、「若さ」や「機能性」に欠けている「老い」のもつ別の力を「老人力」と名付けるのです。〔その他、患者と面談しながら眠ってしまう精神科医・土居健郎の例も面白い。〕

ではザカリアとエリサベトというこの老夫婦の希望のありかはどこにあったのでしょうか。「老い」ということは、若い頃に持っていた**自己実現**の可能性が減少することだと申しました。それを受けとめるには、綾小路きみまろのように「老い」を笑い飛ばすことも、赤瀬川原平のように「老人力」としてとらえ直すことも、大切な意味を持っていますが、いずれにせよ人生のとらえ直し、人生観の転換が必要になります。ルカによる福音書を見てみましょう。人生観を転換させる事件がザカリアに起こります。神殿に仕える祭司であるザカリアは、くじ引きで主の聖所で香を焚くことになりました。その彼に、天使が訪れるのです。つまり神は天使を通して力ある姿を現されたのです。8－12節。「1:8
さて、ザカリアは自分の組が当番

ヘロデ大王の神殿の丘



で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、1:9 祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。1:10 香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。1:11 すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。1:12 ザカリアはそ



れを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。」お香の煙が立ち上る香壇の右に天使が現れます。ザカリアは「それを見て不安になり、恐怖の念

に襲われ」ます。恐れはマイナスの感情ありません。人が「聖なるもの」と出会う時に経験する二つの感情のうちの一つです。「聖なるもの」に出会うとき、人は相反する二つの感情を同時に持つことになります。対象に対する恐怖と同時に、それに向かって引き寄せられる魅力を感じるのです。戦慄

を覚えると同時に魅了されるのです。ザカリアがその場を逃げ出さなかったのはそのためです。

ザカリアの許に遣わされた天使の名は——今はまだ知らされていませんが——ガブリエル(19節)。大切なみ告げ(神の計画)を伝えるときに遣わされる天使です。天使ガブリエルは、旧新約聖書に登場する大天使の一人です。ガブリエルは、ダニエル書9章21－27節では、ダニエルに終末の預言を届けるために登場します。また新約聖書のルカ福音書の1章26－38節では、主イエスの母マリアに現れてイエスの誕生を告知することになります。イスラーム(イスラム教)でも、大切に考えられている天使です。イスラームの創始者ムハンマド(モハメット)は、40歳代に入った頃から、山にこもって祈るようになります。そのある日の「おこもり」の時に、何か不思議な声を聞きます。何を聞いたのか訳は分からなかったけれども、簡単に心から払拭できなかったムハンマ



イスラームの聖地メッカ(マッカ)

ドは、そのことを妻に話します。すると妻も何のことか分からなかったので、友人のキリスト教徒に相談します。するとその友人のキリスト教徒が、ムハンマドはガブリエル（〔ア〕ジブリール）の声を聞いたのに違いないと教えます。この時から始まってコーラン（クルアーン）の言葉を与えた天使



こそがジブリール、ガブリエルなのです。

ザカリヤに現れたガブリエルはこう語りかけます。13節。「1:13…恐れることはない。ザカリヤ、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。」このザカリヤへの告知物語と、同じ天使ガブリエルが、後にマリアに受胎を告げる告知物語は、非常によく似ています。この2つの受胎告知物語は同じパター

ンをとっていると言っていいでしょう。①どちらの母親にとっても子どもを産むということは、つまり出産はあり得ないことでした。ヨハネの母エリザベトは「**不妊の女**」で「**既に年をとって**」いました。イエスの母マリアは、まだ「**男の人を知**」らないのです。そして

②メッセージを伝えた天使は、どちらの場合も天使ガブリエルです。大切なみ告げ（神の計画）を伝えるときに遣わされる天使です。この③天使の出現は、どちらにも「**恐れ**」をもたらします。天使ガブリエルが告げ



「恐れるな」

たメッセージは、途方もないメッセージでした。ザカリヤに向かって「**あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい**」（1:13）と告げ、マリアに

2つの受胎告知物語

ヨハネの誕生 1:5-25	イエスの誕生 1:26-38
(1) 母は出産が不可能です。不妊のため(1:7)。	(1) 母は出産が不可能です。男を知らない(1:34)。
(2) ガブリエルが誕生を告知します(1:11,19)。	(2) ガブリエルが誕生を告知します(1:26)。
(3) 告知は恐れをもたらします(1:12)。	(3) 告知は恐れをもたらします(1:30)。
(4) ガブリエルは子どもの名前を指定します(1:13)。	(4) ガブリエルは子どもの名前を指定します(1:31)。
(5) その子は偉大な人になる(1:15)。	(5) その子は偉大な人になる(1:32)。
(6) 彼はメシアのために道を用意する(1:17)。	(6) 彼はメシアであり、神の子である(1:32-35)。
(7) ザカリヤは疑いをもって天使に質問します(1:18)。	(7) マリアは信仰をもって天使に質問します(1:34)。

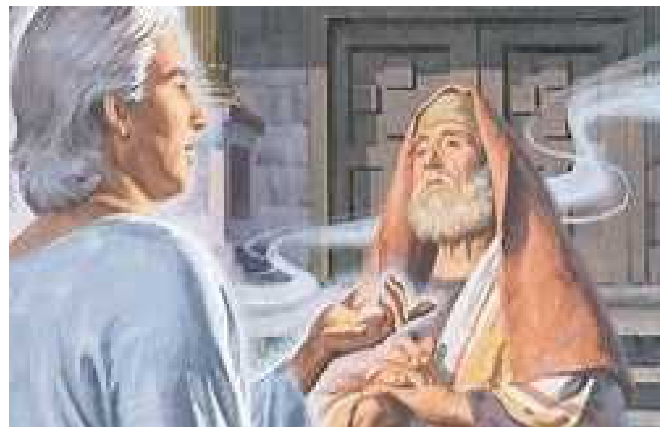
はあなたは「身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」(1:31)と告げるのです。今読みましたように、④どちらにも子どもにつけるべき名前が指定されています。さらに天使はそれぞれの子どもが⑤「偉大な人になる」と告げ、⑥その子どもたちが、人々の救いに関わることになることと伝えます。マリアに向かってガブリエルは、その子は「1:32…いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。1:33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。…1:35…聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」と語り、生まれてくる子どもがメシア(救い主)であり神の子であると告げます。一方のザカリアには、14-17節で、妻エリサベトが産む「1:14その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。1:15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、1:16 イスラエルの多く

の子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。1:17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する」と語り、その子がメシアのために道を準備する者となることを告げます。どちらも何というメッセージでしょう。それらのメッセージは簡単に受け入れられるものではありませんでした。マリアに告げられたメッセージ——男性経験のない自分に懐妊を告げるメッセージ——はにわかに喜べるものではありませんし(30-33節)、ザカリアに告げられたメッセージ——不妊の妻の懐妊のメッセージ——も、にわかに信じられるものではありませんでした(13-17節)。⑦二人はそれぞれに、天使に問わずにはいられませんでした。マリアは尋ねます。「1:34…どうして、そのようなことがありえましょう



か。わたしは男の人を知りませんのに。」そして天使が、生まれてくる子どもが「偉大な人となり、救いの御業を成し遂げる」と語り、「1:36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。1:37 神にできないことは何一つない」と告げると、マリアは「1:38…わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と天使ガブリエルが告げた言葉への信頼・信仰を表明します。一方の、ザカリアに告げられたメッセージも途方もないメッセージでした。ザカリアも、天使に問いただします。18節。「1:18 そこで、ザカリアは天使に言った。『何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています』。」これが、マリアへの告知物語と、ザカリアへの告知物語の決定的な違いです。ザカリアは信じられないのです。「老い」たる者は、若い頃に持っていた自己実現の可能性を失っていきます。常識です。ザカリアの常識は、天使のメッセージをにわかに信じる

ことを許しません。しかしザカリアにも、天使の言葉を信じることが求められています。より根本的には、ザカリアは「人生観の転換」を求められています。つまりザカリアは、人生を自己実現の「場」、つまり自分の若さ(健康)と才能を用いて自らの手で自己実現を成し遂げる「場」と考えているのです。今も持てる力で何ができるかと計算します。「子どもが生まれる?」「ありえない!」と結論します。しかし天使は言います。「ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。」ザカリアは「神のよって願いを聞いてもらう」存在なのです。受身の位置に立っているのです。ザカリアは、人生を、自己実現の場ではなく、自分の人生を主が働かれる〔主の御心がなされる〕《場》として受け入れ直すことを求められています—しかもザカリアの「願い」は否定されていない



のです。パウロはフィリピの信徒への手の中で言いました。「わたしたちのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからです」（フィリピ2:13）。自分の願いは無視されていないのです。しかし自己実現から神の御心の実現へと、意識が転換される必要があるのです。ザカリアの心は、天使が告げるようなことは起こりようがない、と彼に告げます。自分の心に頷きを得るためには、証拠になる何かが必要だ。そしてザカリアは言います。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」この根拠を求めるザカリアの発言に、ここではじめて、天使は自分が天使ガブリエルであることを明かします。19節。「1:19 天使は答えた。「わ



沈黙が新たなレッスンに

たしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。」そしてガブリエルはこう続けました。今求められているのは、神のメッセージへの信頼だからです。20節。「1:20 あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」ザカリアは祭司でありながら、「神を信じること」を我が身をもって学ぶことになりました。人は老いてもまだ学び・成長するのです。外でザカリアを待っていた人々は、ザカリアが何に手間取っているのか不思議に思います。21－22節。「1:21 民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。1:22 ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。」彼は口が利けなくなったのです。神のレッスンです。しかしこの強いられた沈黙こそが、ザカリアの

信仰を成長させることになります。「主の御心になりますように」(天においても、この身においても)と彼の心が告白するまで、つまりザカリアが自分の人生を自己実現の「場」とする考え方から、主が働かれる**つまり主の御心になされる《場》**として受け入れるまで、彼は、沈黙の中で養われることになるのです。

ザカリアの中にも意識の転換が始まりました。彼を取り巻く現状の変化が、彼の中に確信を造り上げていました。23－25節。ザカリアの夫婦は「1:23やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。1:24 その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。1:25 「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」妻エリサベトの言葉は、妻を愛する夫ザカリアの言葉でも



あったでしょう。こうして、ザカリアの人生は、神の御心になされる《場》となっていたのです。

聖書は「老い」た人々に役割を準備しています。ザカリアとエリサベトがそうであり、アブラハムとサライがそうであり、このあとルカ福音書に登場するシメオン(2:25-35)やアンナ(2:36-37)もそうなのです。主は、「老い」たりといえども、その人にふさわしい用い方をなさるのです。その経験と、視野の広さは教会を豊かにする大切な財産でもあるのです。少子高齢化を嘆いてはいけません。ご高齢の方に失礼です。それぞれが大切な神の家族です。神の御心は、「老い」も「若き」もいる、教会というキリストの家族全体によって担われていくものだからです。

最後に、ローマの信徒への手紙12章1－2節のパウロの言葉を読んで閉じたいと思います。「**ロマ12:1** こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。12:2あなたがたはこの世に倣ってはなり

ません。むしろ、心を新たにして
自分を変えていただき、何が神の
御心であるか、何が善いことで、
神に喜ばれ、また完全なことであ
るかをわきまえるようになりなさい。」新しい一週間も、神の御心を求めつつ、アドヴェントに向かって歩んでまいりましょう。祈りましょう。

2019.11.17 日本基督教団千歳丘教会礼拝



1:5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。

1:6 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。

1:7 しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。

1:8 さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、1:9 祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。1:10 香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。1:11 すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。1:12 ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。1:13 天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。1:14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。1:15 彼は主の御前に

偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、1:16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。1:17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」1:18 そこで、ザカリアは天使に言った。

「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」1:19 天使は答えた。

「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。1:20 あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

1:21 民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。1:22

ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見

たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。1:23 やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。1:24 その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。1:25 「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

1:5 Ἐγένετο ἐν ταῖς ἡμέραις Ἡρώδου βασιλέως τῆς Ἰουδαίας ἱερεὺς τις ὀνόματι Ζαχαρίας ἐξ ἐφημερίας Ἀβιά, καὶ γυνὴ αὐτῷ ἐκ τῶν θυγατέρων Ἀαρών καὶ τὸ ὄνομα αὐτῆς Ἐλισάβετ.

1:6 ἦσαν δὲ δίκαιοι ἀμφοτέρωθεν ἐναντίον τοῦ θεοῦ, πορευόμενοι ἐν πάσαις ταῖς ἐντολαῖς καὶ δικαιώμασιν τοῦ κυρίου ἄμεμπτοι.

1:7 καὶ οὐκ ἦν αὐτοῖς τέκνον, καθότι ἦν ἡ Ἐλισάβετ στείρα, καὶ ἀμφοτέρωθεν προβεβηκότες ἐν ταῖς ἡμέραις αὐτῶν ἦσαν.

1:8 Ἐγένετο δὲ ἐν τῷ ἱερατεύειν αὐτὸν ἐν τῇ τάξει τῆς ἐφημερίας αὐτοῦ ἐναντι τοῦ θεοῦ,

1:9 κατὰ τὸ ἔθος τῆς ἱερατείας ἔλαχε τοῦ θυμιάσαι εἰσελθὼν εἰς τὸν

ναὸν τοῦ κυρίου,

1:10 καὶ πᾶν τὸ πλῆθος ἦν τοῦ λαοῦ προσευχόμενον ἔξω τῇ ὥρᾳ τοῦ θυμιάματος.

1:11 ὤφθη δὲ αὐτῷ ἄγγελος κυρίου ἐστῶς ἐκ δεξιῶν τοῦ θυσιαστηρίου τοῦ θυμιάματος.

1:12 καὶ ἐταράχθη Ζαχαρίας ἰδὼν καὶ φόβος ἐπέπεσεν ἐπ' αὐτόν.

1:13 εἶπεν δὲ πρὸς αὐτὸν ὁ ἄγγελος, Μὴ φοβοῦ, Ζαχαρία, διότι εἰσηκούσθη ἡ δέησίς σου, καὶ ἡ γυνὴ σου Ἐλισάβετ γεννήσει υἱόν σοι καὶ καλέσεις τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἰωάννην.

1:14 καὶ ἔσται χαρὰ σοι καὶ ἀγαλλίασις καὶ πολλοὶ ἐπὶ τῇ γενέσει αὐτοῦ χαρήσονται.

1:15 ἔσται γὰρ μέγας ἐνώπιον (τοῦ) κυρίου, καὶ οἶνον καὶ σίκερα οὐ μὴ πίῃ, καὶ πνεῦματος ἁγίου πλησθήσεται ἔτι ἐκ κοιλίας μητρὸς αὐτοῦ,

1:16 καὶ πολλοὺς τῶν υἱῶν Ἰσραὴλ ἐπιστρέψει ἐπὶ κύριον τὸν θεὸν αὐτῶν.

1:17 καὶ αὐτὸς προελεύσεται ἐνώπιον αὐτοῦ ἐν πνεύματι καὶ δυνάμει Ἡλίου, ἐπιστρέψαι καρδίας πατέρων ἐπὶ τέκνα καὶ ἀπειθεῖς ἐν φρονήσει δικαίων, ἐτοιμάσαι κυρίῳ λαὸν

κατεσκευασμένον.

1·18 Καὶ εἶπεν Ζαχαρίας πρὸς τὸν ἄγγελον, Κατὰ τί γνώσομαι τοῦτο; ἐγὼ γάρ εἰμι πρεσβύτης καὶ ἡ γυνή μου προβεβηκυῖα ἐν ταῖς ἡμέραις αὐτῆς.

1·19 καὶ ἀποκριθεὶς ὁ ἄγγελος εἶπεν αὐτῷ, Ἐγὼ εἰμι Γαβριήλ ὁ παρεστηκὼς ἐνώπιον τοῦ θεοῦ καὶ ἀπεστάλην λαλῆσαι πρὸς σέ καὶ εὐαγγελίσασθαί σοι ταῦτα·

1·20 καὶ ἰδοὺ ἔση σιωπῶν καὶ μὴ δυνάμενος λαλῆσαι ἄχρι ἥς ἡμέρας γένηται ταῦτα, ἀνθ' ὧν οὐκ ἐπίστευσας τοῖς λόγοις μου, οἵτινες πληρωθήσονται εἰς τὸν καιρὸν αὐτῶν.

1·21 Καὶ ἦν ὁ λαὸς προσδοκῶν τὸν Ζαχαρίαν καὶ ἐθαύμαζον ἐν τῷ χρονίζειν ἐν τῷ ναῷ αὐτόν.

1·22 ἐξελθὼν δὲ οὐκ ἐδύνατο λαλῆσαι αὐτοῖς, καὶ ἐπέγνωσαν ὅτι ὀπτασίαν ἑώρακεν ἐν τῷ ναῷ· καὶ αὐτὸς ἦν διανεύων αὐτοῖς καὶ διέμενεν κωφός.

1·23 καὶ ἐγένετο ὡς ἐπλήσθησαν αἱ ἡμέραι τῆς λειτουργίας αὐτοῦ, ἀπῆλθεν εἰς τὸν οἶκον αὐτοῦ.

1·24 Μετὰ δὲ ταύτας τὰς ἡμέρας συνέλαβεν Ἑλισάβετ ἡ γυνὴ αὐτοῦ καὶ περιέκρυβεν ἑαυτὴν μῆνας πέντε λέγουσα

1·25 ὅτι Οὕτως μοι πεποίηκεν κύριος ἐν ἡμέραις αἷς ἐπέιδεν ἀφελεῖν ὄνειδός μου ἐν ἀνθρώποις.